

宗乘實踐の諸問題

山田靈林

問題を要約して

親兄弟水入らず、榾火でも焼きながら、話しあふ心やすさで、氣がねもなく遠慮もなく、思ふまゝ感ずるまゝを書き述べる。

私は學校の實踐宗乘會へ一度もまだ出てゐない。その出版物も見せて貰つことがない。それがために筆を執つてから心が戸惑ひを始めた。しかし宗乘を實踐するについての問題は、紛然雜然、次ぎからく頭の頭に浮んでくる。これをかまはず書きつけてしまへばとも思ふが、それでは冗漫に流れてしまふ憂ひがある。そこで頭に浮んだだけのものを整理して、現在宗門に僧籍を有する人々の顔を臉に描き出して、それに類別をつけて名稱をつけて見た。――

泰然派、これは無心起作派といつてもいゝであらう。坐禪儀の宗乘自在なんぞ功夫を費さんといふところ、證道歌の任運騰々として什麼に得たりといふところ、そこに腰をおろして、泰平無事、風が吹かうが雨が降らうが、一向に感じない一派である。

焦心派、これは起心看淨派といつてもいいであらう。これには更に、法城嚴護派と社會進出派との區分をなすことが出来る。更にまたそれを幾派にも區分をなす必要があるやうに感ぜられる。

かういつた風の名稱をつけて、順次攻究を進めてゆくことは、決して意味ないことでないと思ふ。しかしそれでは個人批評をでもしてゐるやうに、誤解される心配がある。仍てポーズをすつかり變へて、法儀法式の問題、教義教條の問題、思想體系の問題、精神氣魄の問題といふ四項目をあげて、宗門の現狀に即しつゝ攻究を進める事にしようと思ふ。攻究といつてもできるだけ具體的の事項について語るにとどめる。

法義法式の問題

今朝も宗教的情熱に燃ゆる青年の來訪を受けた。關東に最も隆昌を極めてゐると世間からいはれてゐる宗派に、僧籍をもつ青年である。青年はいふ。「私は中學を出る頃から宗教への憧憬を抱いた。高等學校に入つてから病に冒される身となつて、斷然學校を廢めて僧侶になつた。しかし寺の生活は私の氣もちをいらだたす以外の何ものでもなかつた。明けても暮れても葬式法事、たゞそれだけだ。安心がどこにある立命がどこにある。葬式稼業で妻子を養つてゐるだけのことだ。ばか／＼しい、私は寺を出てしまった。今は新聞配達をしてゐる。今朝のやうな寒氣凜烈の中を新聞を脇に抱へ込んで走る氣持は、怠け者には一生かゝつても味へない爽快さである。」といつてそり返つた。しかし青年は宗教への憧憬を捨てゝゐるのではなかつた。葬祭について恐ろしく懷疑的になつてゐるのである。

昨年の秋冬にかけてであつた、坐禪の會があつて、東京から遠い地方にゆき、その僧侶の方々の、實踐宗乘會と

でもいふべき會にも出席した。席上いろいろの問題が出た中に、葬祭の事があつた。そしてそれは戦死病歿者の葬儀についての論究であつた。神式がどうの佛式がどうのといふことが花々しく論議された。佛式でも何宗ではどう何宗ではどうといふ論争もあつた。そのとき某師はいはれた。「何式でやつたつていゝでせう。何宗が先きでも後でもいゝでせう。實力ですよ。後先きが問題ぢやない。どつちが有りがたいかが問題です。本當に會葬者が感涙にむせぶ法儀を行つて御覽なさい。こつちから言つて出なくとも、向ふから懇願して來ますよ」と。

高楠順次郎先生が或る寺の大法會に參詣して述懐されたことがあつた。「この寺は一たいどうしたのでせう。十年にもなるが私が初めてこの寺に參詣したときには、何百人といふほど大勢の坊さんが、行道して經文を読まれたがわき見などをする人は一人もなかつた。手のおさめ方から歩み方から、實に整然たるものであつたが、今はまた何といふことであらう」とその寺のために嘆かれた。

これはまたつい此の間のことであるが、東京の或る寺で、歌舞伎俳優某氏が施主となつて法會をつとめた。そのとき特請をうけて行かれた某氏が話に、二三十人も俳優が參詣したが、長い讀經中、身搖ぎ一つする俳優がなかつた。初めから終りまで、疊の上にびたり坐つたきりであつたが、それに引きかへて坊さんの方は、といつてゐられた。

北野禪師が初めて戒師をつとめられたときでないかと思ふ。それは高輪の泉岳寺の戒會であつたやうに聞いてゐるが、禪師は登壇して感涙滂沱、言葉を出されることができなかつた。戒弟の中にゐた某師は戒會につくこと幾たびといふ程で、滅多に感激などしない。いはゞ宗教性の硬化した人であるが、その人が禪師のこの登壇には感極つて嗚

咽してしまつたと、自らいはれたのを今も忘れることが出来ぬ。

井上耕哉師はこの間、弟子の得度式を行つて、その日の様子を語るに、涙で聲を潤ませてゐた。弟子も師匠も参詣者も皆泣いたであらう法會を思うて、私も眼がしらの熱くなるのを、どうする事も出来なかつた。

青松寺の鐵額老師が「東京の人はイースンニューアンが有りがたいといふ。お経は聞いてゐて意味の解るやうな氣のするものも、有りがたいが、解らんやつの方が有りがたがる。はア」といつてゐられたあの顔が、まさしく眼の前に見へてなつかしい。老師が法堂の進退は寔に、堂に入つて仰がれた。維那や堂行の打つ磬子や木魚などについて、細心な注意を拂はれた。

私は老師のそれにあまりにも深く、心惹かるゝからでもあらうか、磬子をやけに、たゞきついたり、木魚を亂調子にたゞいてゐる人を見ると、何故宗門には法式作法の講習等がないであらうかと思ふ。この講習こそ宗門の最大緊要事であるのにとさへ痛感せしめらる。

坐禪のことを法儀式の問題下でいふのは、變なやうな氣がするが、やはりこの問題である。

坐禪といふと、坐よりも禪、身相よりも心境、それに重點が置かれる傾きがある。がこれは改めねばならぬ事である。さればこそ高祖大師は實際の修行者を導かれるそのときには、坐禪といふ言葉よりも、只管打坐といふ言葉を多く用ひなされたのであると拜察せざるを得ぬ。

坐禪をするといふけれども、實際に吾等が意志的に爲し得るのは坐であつて、禪ではない。禪は坐を修するところ

に、おのづから現はれる心境である。坐を修することなくして、禪を得やうとしても、金輪際それは得られざるころのものである。

坐禪は難しい、出家人すら修する事は容易でない。況や在家人をやといふ人がある。何たる事であらうか、宗門から坐禪修行を除いたら、一たいどういふ事になるのであらうか。

坐禪、只管打坐、これはその身相に關する限りに於て、その要は、身相端然、肚裡牢乎、氣息吽修、これである。中についても肚裡牢乎の重要なことは、謂はゆる禪語の彈力的なるそれについても、うなづかれ得るのである。

肚裡牢乎、それはたとへば、桶の箍のしつかりしてゐる。それに比すべきものである。箍のゆるんだ桶の價值なきが如く、肚裡の弛緩した人間は、取るに足らざるものといはねばならぬ。坐禪はこの意味に於て、何人もこれを一日も半時も忽せにしてならないところのものである。

教義教條の問題

法儀法式を輕んじたり、忌避したり、乃至は單なる稼ぎの具に供したり等する傾きのあるは畢竟するに、その教義教條に對する信仰が足りないからである。

教義教條なんてものは、禪家にはない。禪家は不立文字だといふ人がある。果して然うであらうか。

不立文字といふ提示は達磨大師の頃からあつた。楞伽師資記などによつても明らかである。

學人依文字言語爲道者。如風中燈。不能破暗、焰々謝滅。

若淨坐無事、如密室中燈。則能破暗、照物分明。

と書いてある。少室逸書を見ても、

修道者、依文字中、得解者、氣力弱、若從事、上、得解者、氣力壯。

といふやうな言句が至るところにある。不立文字が禪家の標榜であるといふ事には、誰しも異存はない。

しかしながら、不立文字といふことを以て教義教條を立てぬといふことであると思ふものがあるとするれば、その洞察の淺く、その見聞の狭いのに驚かざるを得ぬ。

不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛。

これは大部後代になつてからの成語であるといはねばならないが、この思想この行法は、達磨大師のとき、既に行はれてゐたのである。

凡教人智慧、未曾說法、就事而徵、指樹葉是何物。

といふやうな文字を見ると、直指人心でなくて、直指事相であるやうにも思へるが、しかし達磨大師と二祖大師との安心問答等を思ひ合せれば、おのづから事は明らかとなる。

禪家には他宗他派のやうに。所依の經典はない。經典から割り出された教義教條はない。しかしながら佛々祖々が身心を擧して、實踐し提示されたところのものがある。文字に依らず、心より心にと直々に單傳せられるところの教

義教條がある。

九〇

文字に依らず、心より心に直々に單傳されるところの教義教條があるのみでない。その補ひとしてこいふか、備忘としてこいふか、謂ふところの室内の三物がある。きりかみがある。

補ひとしてとか、備忘としてとか、といつては甚だ穩當を缺く。三物やきりかみを冒瀆するものであるといつて、憤慨しない人はないであらう。それほど吾等は、文字に深く依存するところの教義教條をもつてゐるのである。

宗門には文字に依存しない教義教條があり、同時に文字に依存する教義教條があるのである。文字に依存する教義教條は三物やきりかみのみでない。兩祖大師の親言は悉くそれである。中についても爰に特に拜記して、注意を喚起したいのは、高祖大師が三時業の卷に於て提示したもうたところの教義教條である。

今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨へざる邪見の黨侶には群すべからず。とあるこれである。此の文字の教義教條に、吾等が徹底的なる歸投をなし依伏をなすならば、法義法式が今日のやうな事にはならぬのである。

教義教條を信受奉行しないところに、宗門の命脈があり得ようや。教義教條なしに行ふ葬祭が嵩高であらう道理がなく、壯重であらう謂れがない。

思想構想の問題

宗教宗派には必ずその法義法式があり、教義教條がある。信じてこれを護つておれば、それでいゝのかといふに、さうでない。宗教宗派に屬するものは、その法義法式について、教義教條について、乃至それらと文化一般との關係についての、思想的なる體系をもつ事が必要であり、また藝術的なる構想をもつ事が必要である。

しかも此の思想體系にしても、藝術構想しても、それは常にその時代の文化から、游離せるものであつてはならぬのである。如何に高尚幽遠な思想であり藝術であつても、時代の思索に入り難いものであつたり、時代の感覺に縁の遠いものであつたりしたのでは、その宗教宗教をその時代のものたらしめる事ができぬ。

今日宗門に於て行ふとこの戦死病死者の葬儀、それが教義教條に基いてのものである事はいふまでもない。しかしながら英靈が如何に引導されるか、引導される英靈そのものゝ正體は何か、等についての教義教條を現代の人の心に納得されるに足る思想體系ができてゐるか、藝術的構想ができてゐるか、といふ事になると、甚だ心細い。

今日英靈について語る事は、迷へる人々の心を明るくする事である。佛教の昂揚弘通によつて、人の迷暗を破る絶好の機會である。此の機會に於て、英靈についての信仰も教義教條も實際に於て相當に努力して説かれてもゐる。しかしながらそれを思想的に體系的に、現代人の理知が深くうなづくやうに説述する人は多くない。藝術的構想的に、現代人の情意が深くうなづくやうに提示する人は多くない。

神と佛との問題の如きも、今日その徹底的なる究明が、思想的に致されねばならぬときである。佛教徒がこれを致

さないそのときには、どういふ事態が惹き起されるか、誰にだつて推斷はつく筈である。佛教が傳來して程なく、神と佛との問題の起つたそのときには、思想的には本地垂迹といふ思想が生れて納りがついた。それが後ちになると、一つの轉向が餘義なくされた。更にそれはまた轉向されねばならぬ必然性をもつてゐる。本地は地理的になど考ふる時代は夙うの昔に過ぎ去つたのである。

ともかく、此の問題の攻究を輕忽にするが如きは、國民としても、佛教徒としても、道に忠なるものでないといはねばならぬ。

ソ聯が宗教否定をやつた話は、誰も知つてゐるが、ナチスドイツル宗教否定をやつてゐる形である。ドイツの精神運動者達はバイブルを讀む代りに、エダを讀めといふ。エダといふのは純ゲルマンの傳説や神話を集めた古典である。

エダを讀んで民族的の熱血を沸きたぎらすのである。ゴツトを信ずる代りに自己を信ぜしめるのである。戦線の勇士が死んだときでも、銃後の國民が死んだときでも、牧師を請しない。そこに集つた人々が演説をしたり、手を擧げたりして、故人の生涯を讃へるだけで、葬式は終つてしまふのだといふ。

禪家の存在意義は、宗教としてよりも人間鍊成といふ事に存する。禪家の特色は肚を鍊り剛健なる人物を鍛鍊する事に存するといふ人がある。禪を假りにその程度のもつとして、そこに存在意義を認むるにしても、それでいゝ氣になつてゐると、すつかり他へ株を取られてしまふ事がないといはれない。

何れの方面より見ても、忽せにしてならないのは、思想構想への努力である。

精神氣魄の問題

思想が大事であり、構想が大事である事は、述べ來つたところであるが、但しこれに偏寄してしまふと、これまで何ともして見ようのない事になってしまう。現代文化が行き詰つたといふのは、現代人が思想に偏寄してしまつたからである。

現代人は殊にその指導階級の人は、何かといへば理知の頭を持ち出して来る。推理をやる推論をやる。而してそこに論理的必然として歸結する所のものを以て、最高至上のものとする。

しかるに實際の世の中は、論理的必然によつて動く事を殆どしない。實際の世の中では、論理的必然から來るものを机上の空論であるとして、嘲笑しようとする。實際の世の中は、論理の線に沿うて動くのでなくして、行動の線に沿うて動くのである。思想で動くのでなくして、人格で動くのである。

人格、その内容として、思想が重要な位置を占めてゐる事は勿論であるが、その思想にも増して重要な位置を占めてゐるものは精神である。

思想と精神、これを吾等は屢々區別しないである。けれども嚴然たる區分がその間につけられべきものである。思想は知に屬し、精神は情意に屬す。

人間の心を常識的には、知と情と意とに區分して、知は頭に、情は胸に、意は肚にといふ。而して頭は冷かに、胸は温かに、肚は窄くといふ。實際的問題としてこれは良き區分である。

冷かな頭によつて、さへくとした推理が行はれる。温い胸によつて、美しい情熱が沸き起る。牢い肚によつて聖い決意が行はれる。頭と胸と肚、此の三つが一つになつて獅子奮迅の三昧が行はれるとき、人間は初めて眞實の人格を具備するのである。

吾等は人格を具備せねばならぬ。佛は人格の最も完全圓滿なるものを具備したまふ方である。佛に一如するが如き生活を展開し得る精進、これが宗乘實踐の要訣であらねばならぬ。

宗乘實踐のために、吾等は頭への偏寄に終始してはならぬ。思想への偏寄に始終してはならぬ。胸へ、情熱へ、肚へ、決意へ、此の精進がなければならぬ。今日吾等に最も缺けてゐるところのものは、胸へ情熱へ肚へ決意への精進である。更にいへば頭と胸と肚を打して一團とせる獅子奮迅三昧の精進が缺けてゐるのである。

此の缺けたるところを補強するの一路、それは只打坐行である。打坐のとき、肚裡牢乎のとき、精神はおのづから昂揚し、氣魄はおのづから燃え上る。情熱は沸き、聖意は躍る。

打坐である、此處に實踐宗乘體認の道は開かれる。思想である此處に實踐宗乘昂揚の道は開かれる。入りては坐し、出でゝは思ふ。法義法式は此處に壯嚴を極め、教義教條はこゝに信受いたされる。